

アパートさがし

キヤスト 不動産屋

客

舞台、不動産屋。
客が入ってくる。

不動産屋 「あ、いらっしやいませ。今日はどのような高層ビルをお探しで」

客 「あ、いや、あの、ビル探してないです」

不動産屋 「あ、そうでしたか。てっきり高層ビルをお探しの方かと」

客 「何でそうなるんですか」

不動産屋 「だって、セレブリティの方ですよ」

客 「いや、そんな風には見えなと思いますけど」

不動産屋 「そんな風に見せないのが最近のセレブリティなんですよ。困るんですよ、そういうの」

客 「あの、私、アパートを探しに来たんですけども」

不動産屋 「あ、そうなんですか？これはこれは失礼しました。どうぞこちらへおかけになっ

てお待ちください」

客 「はい」

客、イスへ座る。

不動産屋、奥からお茶を用意して、客へ。

不動産屋 「つまらないお茶ですけど」

客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋
客 不動産屋

「あ、ありがとうございます」
「まあ、面白いお茶って何だっって話ですけどね」
「……」
「で、どのような物件をお探しで」
「あ、そうですね、あの」
「ご予算は」
「え？あ、あの、そうですね」
「間取りは」
「ええ？あ、あの、ですね」
「駅はよくご利用されますか」
「あ、あの」
「近所付き合いは」
「すみません」
「はい？」
「ちょっと早いです」
「早い？」
「今のところ私どの質問にも答えられてないです」
「あれ？答えてませんでしたっけ？」
「答えてませんよ」
「なんか、見晴らしのよい48階建てのビルがなんとかって」
「言ってますせんよ。私高層ビル探してないです」
「ほんとですか？やっぱりあなたセレブリティじゃ」
「ないです」
「年収8億の方ですよね？」
「全然違いますよ。どこから出てきたんですかその金額」

不動産屋 「いやいや、失礼しました」
 客 「あと、近所付き合いはって聞かれた気がするんですけど」
 不動産屋 「え？私そんなすっとんきょうなこと言いましたっけ」
 客 「あれ？言ってませんでしたっけ」
 不動産屋 「そんなこと聞く人がいたら、何回か会ってみたいですよ」
 客 「まあ何回も会う必要はないと思いますけど」
 不動産屋 「じゃあ改めてお伺いしますね。近所付き合いは」
 客 「やっぱり言うてるじゃないですか」
 不動産屋 「いや、大切ですからこれ」
 客 「すっとんきょうなことって言ったじゃないですか」
 不動産屋 「あなたよく分からない人ですね」
 客 「私のセリフですよ」
 不動産屋 「今日は開店早々ミステリアスだ」
 客 「はい？」
 不動産屋 「ミステリアスから始まる一日ってあるんですね、人生には」
 客 「何を言ってるんですか」
 不動産屋 「でも嫌いじゃないんですよ、こういう展開」
 客 「何一人で感動してるんですか」
 不動産屋 「よし決めました」
 客 「はい？」
 不動産屋 「今日は特別に、ミステリアスのかけらもない軟弱なお客様には絶対出さない、私
 おすすめの超優良物件、ご紹介させていただきます」
 客 「ありがとうって言うっていいんだらうか」
 不動産屋 「覚悟してくださいよ」
 客 「ミステリアスな展開だ」

不動産屋

「で、ご予算は」

客

「あ、えーと、高くても5万円くらいですね」

不動産屋

「希望の間取りなんかはありますか」

客

「まあ、特にはないです」

不動産屋

「駅はよく利用されますか」

客

「あ、よく使うのでなるべく駅に近いほうがいいですね」

不動産屋

「なるほど。じゃあ、そういった希望は一切無視しますね」

客

「じゃあ聞かないでくださいよ」

不動産屋

「ちよっと待っていてくださいね。今資料持ってきますから」

不動産屋、資料を取りに行く。

不動産屋、資料と自分のお茶を持って戻ってくる。

不動産屋

「お待たせしました。私も喉渴いたんでお茶いただきますね」

客

「あ、どうぞ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋

「このお茶超面白いなあ」

客

「え？」

不動産屋

「超うける」

客

「そうなの？」

客、お茶を飲む。

客
不動産屋

「全然面白くない」
「まずはこんな物件どうでしょうか」
「あ、はい」

不動産屋、資料を見せる。

不動産屋

「まあ何の変哲も無い3LDKYNなんですけども」

客

「まあYNの時点で私は変哲を感じてますけど」

不動産屋

「いや、でも家賃のほうが格安なんですよ」

客

「いくらですか？」

不動産屋

「なんと9800円」

客

「え？かなり安いですね」

不動産屋

「このあたりじゃ考えられない家賃ですよ。屋根が無いだけでこんなに安いアパートに住めるんですから…」

客

「屋根が、無い？」

不動産屋

「はい」

客

「え？無いんですか？屋根」

不動産屋

「まあ、あるか無いかで言えば、無いですよ」

客

「いや、無いですよって」

不動産屋

「でもそれだけでなんと9800円」

客

「じゃあYNっていうのは」

不動産屋

「あ、屋根なしの略です」

客

「いや、ダメだと思えますけど」

不動産屋

「そうですかね」

客

「じゃあ、雨とか」

不動産屋

「じゃあ、雨とか」

不動産屋 「もうバンバン入ってきますよね。プライベートとか一切関係ないですから、雨は」
客 「それダメですよね」

不動産屋 「ダメですかね。なんかこう、自然と共にみたいな？ネイチャーな感じがいいなっ
て」

客 「いや、私住むところににそういうの求めてないんで」

不動産屋 「あ、じゃあダメですね。もしかしたらお客様アレですか？雨にぬれるとパニック

起こして猫に変身しちゃうとかそういうタイプの方ですか？」

客 「そういうタイプではないです」

不動産屋 「じゃあいいと思うんだけどなあ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋 「超うける」

客 「え？」

客、お茶を飲む。

客 「何がうけるんだろ」

不動産屋 「じゃあ、この物件どうですかね」

不動産屋、資料を見せる。

客 「え？あ、はい」

不動産屋 「まあ、何の変哲もない3LDK6Sなんですけど」

客 「え？あ、あの、もう1回いいですか？」

「いや、だから何の変哲も無い3LD3K6Sなんですけど」
客 不動産屋 「何かの暗号ですか？」
客 不動産屋 「いやいや、部屋の間取りですよ。3LD3K6S」
客 不動産屋 「え？キッチン3つもあるんですか？」
客 不動産屋 「はい、まあ急遽ちよつとしたパーティーを開かなきゃいけないってときにもバツ
チリ対応できますよ」
客 不動産屋 「まずそういう機会が無いと思います」
客 不動産屋 「それは分からないですよ」
客 不動産屋 「まあ、万が一あるにしてもキッチン3つはいらなですよ」
客 不動産屋 「便利だと思うんですけどね」
客 不動産屋 「でも、私あんまり料理しなですし」
客 不動産屋 「そこに関しては心配いらなですよ」
客 不動産屋 「何ですか」
客 不動産屋 「そういう方のため6Sですから」
客 不動産屋 「6Sって何ですか。そもそもSって何ですかSって」
客 不動産屋 「シェフです」
客 不動産屋 「シェフ？」
客 不動産屋 「シェフが6人つきます」
客 不動産屋 「6人つく？」
客 不動産屋 「はい。専属のシェフが6人もつくんですよ。それで家賃4万円」
客 不動産屋 「それは安いですね。でも何で6人もつくんですか？」
客 不動産屋 「あの、それぞれの得意分野というか、まあジャンルが違いますから」
客 不動産屋 「具体的には？」
客 不動産屋 「順番に、和・洋・中・和・洋・中ですね」
客 不動産屋 「3人でよくないですか？」

不動産屋

客 「いや、それぞれ料理スタイルが全然違うんですよ」

不動産屋

「たとえば、洋食専門のシェフで吉岡さんと山口さんがいるんですけど、吉岡さんは普通のナポリタンを作るタイプですし、山口さんはナポリタンにちよっとオリジナリティを加えて、ナポリタン・地中海の香りを添えてみたいな感じの料理を作るんですよ」

客

「あ、注文するときちょっと恥ずかしくなるやつですね」

不動産屋

「まあそういうのが好きな人もいますから。だからこそ6人いるんですよ」

客

「だからまあ、飽きることは無いと思いますよ」

不動産屋

「確かにちよっとしたパーティにも対応できそうですね」

客

「いや、だいたいいいと思います」

不動産屋

「いいですよ。6人のシェフと一つ屋根の下寝食を共にして生活するっていうのはやっぱり」

客

「え？あ、え、今何て言いました？え？寝食を共にするんですか？」

不動産屋

「はい」

客

「いや、はいって…え？シェフは食事のときにだけ来るとかそういうのじゃないんですか」

不動産屋

「いやいや、それはもう、仲間意識でワイワイやってもらいたいなと」

客

「絶対楽しいと思いますけど。6人のおじさんと一緒に生活を…」

不動産屋

「おじさん？いや、おじさんじゃなくても厳しいですよ」

客

「8ヶ月ぐらいしたらだいたい慣れてきますから」

不動産屋

「慣れるまでけっこうかかりますね…ってそういう問題じゃないですよ」

不動産屋 「寝るときはみんなで川の字になって：あ、川の字が2つできますね。すごい」

客 「何がすごいんですか」

不動産屋 「あ、7人になるから1人余るか」

客 「そんな発見いららないですよ」

不動産屋 「ダメですか？」

客 「もちろんダメですよ。あ、あと一つ気になったんですけど」

不動産屋 「何ですか？」

客 「シェフって頭文字SじゃなくてCですよね」

不動産屋 「まあ、何の変哲も無い3LD3K6Cなんですけど、キッチンが3つありまして、

ちよつとしたパーティにも：」

客 「なに最初からやり直そうとしてるんですか」

不動産屋 「お客様、シェフの頭文字ってSじゃなくてCなんですよ」

客 「それ私言ったやつですよ」

不動産屋 「ダメですか」

客 「ダメに決まっていますよ」

不動産屋 「お客様もわがままですねぇ」

客 「全然わがままじゃないですよ」

不動産屋 「じゃあどれ紹介しようかなあ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋 「さっきよりはうけないなあ」

客 「え？」

不動産屋 「ややうけって感じ」

客、お茶を飲む。

客 「違いが分からない」

不動産屋 「(資料を見せながら) じゃあこの物件どうですか? 何の変哲も無い1000LD
Kです」

客 「1000:1000? リビング多すぎますよね」

不動産屋 「違いますよ。ダイニングとキッチンが少なすぎるんです」

客 「どっちでもいいですよ」

不動産屋 「いいんですか? ではこちらにサインを」

客 「そういう意味じゃないです」

不動産屋 「ダメですか」

不動産屋 「(資料を見せながら) じゃあこの物件はどうですか? 何の変哲も無い3LDKY
Nなんですけど...」

客 「また屋根無しじゃないですか」

不動産屋 「違いますよ。床が無いんです」

客 「床が無い? どのような状態ですか」

不動産屋 「土です」

客 「ダメです」

不動産屋 「木目調の土です」

客 「ダメです」

不動産屋 「美しい土です」

客 「だからダメですって」

不動産屋 「お客様はなんてわがままなんだ」

客 「どこがですか。もうそろそろ普通の物件紹介してくれませんか」

不動産屋

客

不動産屋

客

不動産屋

客

不動産屋

「イヤです」

客

「何で」

不動産屋

「普通のアパートなんて軟弱な一般人が住むところなんです。お客様はミステリアスだから」

客

「そこがおかしいんですって。私一般人です」

不動産屋

「違う、あなたは全然違う」

客

「私の何が分かるんですか」

不動産屋

「何も分からないですよ」

客

「そうですよ」

不動産屋

「だからこそミステリアスなんですよ」

客

「初めて会ったんだから何も分からないの当たり前でしょ」

不動産屋

「そんなに普通のアパートに住みたいんですか？」

客

「お願いします。私は最初から普通のアパートに住みたいんです」

不動産屋

「分かりました。その前にちょっとお茶飲んでもいいですか？」

客

「どうぞ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋

「うまい」

客

「え？」

不動産屋

「どうかしました？」

客

「いや、何でもありません」

不動産屋

「（資料を見せながら）ではこちらの物件はどうですか？普通の3LDKです」

客

「あ、これですね」

不動産屋

「アパート自体は築5年なんでけっこうきれいですよ。収納も多いですし」

客 不動産屋 「確かにこれは良さそうですね。ちなみに家賃はどれくらいなんですか？」

客 不動産屋 「4万5千円です」

客 不動産屋 「4万5千円…予算内で収まりますね。これはいいな」

客 不動産屋 「いいですよ。まあ、ちょっと難点があるとすれば」

客 不動産屋 「また怪しいのじゃないですよ」

客 不動産屋 「違いますよ。ちょっと駅まで遠いんですよ」

客 不動産屋 「そうなんですか？」

客 不動産屋 「最寄り駅まで徒歩30分なんですよ」

客 不動産屋 「確かにちょっと遠いですね」

客 不動産屋 「でもまあ、このあたりはバスが通ってますからそれを使えば5分で行けま

客 不動産屋 「すので特に問題は」

客 不動産屋 「はい？」

客 不動産屋 「はい？」

客 不動産屋 「ベ…バス？」

客 不動産屋 「そうですね。このあたりは市営のバスが通ってますので」

客 不動産屋 「え？あの」

客 不動産屋 「何か？」

客 不動産屋 「バスってなんですか？」

客 不動産屋 「いや、バスですよ」

客 不動産屋 「いや、それが分からないんですよ」

客 不動産屋 「え？普段使いませんか？バス。私いつも使ってますよ」

客 不動産屋 「バスって言葉自体を聞いたこと無いです」

客 不動産屋 「便利ですよ、バス。このあたりだと10分間隔で市営のバスが通りますから」

客 不動産屋 「バスみたいなものですか？」

客 不動産屋 「バスはバスですよ。バスはバスですよ」

客 不 動 産 屋 「だからその、ベスって何なんですか」

客 不 動 産 屋 「いや、説明するまでも無いでしょ」

客 不 動 産 屋 「え？ここでは普通に使われてるんですか？その、ベス」

客 不 動 産 屋 「そうですね。最近是非ステップベスも出てきましたから」

客 不 動 産 屋 「ノンステップベス？」

客 不 動 産 屋 「今の時代はバリアフリーですから」

客 不 動 産 屋 「まあ、そうですね」

客 不 動 産 屋 「しかも来年からはハイブリッドベスまで出てくるんですよ」

客 不 動 産 屋 「ハイブリッドベス？」

客 不 動 産 屋 「これからの時代は環境のことも考えなきゃいけないですからね」

客 不 動 産 屋 「そうですね」

客 不 動 産 屋 「あ、何年か前になるんですけど、シュガーレスベスっていうのが一時期出たんですよ」

客 不 動 産 屋 「シュガーレスベス？」

客 不 動 産 屋 「まあ文字通りシュガーを一切使わないベスだったんですけどね」

客 不 動 産 屋 「普通のベスは砂糖使ってますか？」

客 不 動 産 屋 「たくさん使いますよ。だから夏になると全体的にべたついてくるんですよ」

客 不 動 産 屋 「はあ」

客 不 動 産 屋 「それが評判悪くて、シュガーレスのベスが出たんですけど、でもやっぱり砂糖じゃないとうまく性能を発揮できないんですよ。ベスも機嫌悪くなりますし」

客 不 動 産 屋 「え？ベスって生き物なんですか？」

客 不 動 産 屋 「いや、生き物って感じでもないですねえ。もう、ジャンルとかカテゴリーとか、そういうのには一切あてはまらない存在ですよ、ベスは」

客 不 動 産 屋 「あの、全然イメージがつかないです」

客 不 動 産 屋 「1人ひとりの心に、それぞれのベスがいるんですよ」

客 「まあ、私にはいいですけど」

不動産屋 「だからまあ、駅から遠い物件ですけど、全然問題はないですよ」

客 「あの、そのベスって私も使えるんですか？」

不動産屋 「大丈夫ですよ。まあ使う前には市役所で申請しないとイケないですけどね」

客 「申請が必要なんですか」

不動産屋 「そうなんですよ。市役所で職員の人からベスファナライザーを受け取らないと使えないんですよ」

客 「ベスファナライザー？」

不動産屋 「はい。それを身にまとわないと、ベスが止まってくれないんですよ」

客 「身にまとうって、服なんですか？」

不動産屋 「服ではないですね。ファナライザーです」

客 「そのファナライザーが分からないです」

不動産屋 「まあ簡単に言うと、雰囲気です」

客 「雰囲気？」

不動産屋 「はい。市役所で申請すると、その、ベスを使いたいっていう雰囲気を 身にまとえるんですよ」

客 「それは申請しないと身にまとえないんですか？」

不動産屋 「まともないですよ。しかも申請しないで使うのは条例で禁止されていますから。違反すると次の日絶対お腹痛くなりますよ」

客 「あ、罰金とかじゃないんですね」

不動産屋 「でも辛いですよ。絶対痛くなるんですから」

客 「絶対痛くなるのはイヤだなあ」

不動産屋 「そうですね。まあそうならないためにも早めに市役所に行って申請することをおすすめします」

客 「分かりました。あ、ちなみに市役所ってどこにあるんですか？」

不動産屋

客

不動産屋

客

「ここからだ徒步1時間はかかりますね」

「遠いですね」

「でもまあ、無料のバセを使えば10分で着きますから問題はないですよ。まあ、

使う前には県庁に行ってバセファンライザーを……」

「あの、もういいです」

幕。

作 猿橋 勇人